

研究成果の紹介

イチジク果実被害軽減のための光反射資材によるアザミウマ類抑制効果

アザミウマ類に対し忌避効果があるとされる光反射資材をイチジク樹の周囲に設置したところ、特に発生が多い6月中下旬に資材区でアザミウマ類の数が少なく推移し、抑制効果が認められた。果実被害の軽減効果については、判然としなかった。

内容

イチジク栽培において、アザミウマ類は果実内部に侵入して加害し、褐変・腐敗を引き起こす。被害は果実を切断しないと判別できず（写真1）、出荷後にクレーム対象となることもある。生産現場では、農薬散布による防除を数回実施しているが、完全に防ぐことは難しい。

そこで、アザミウマ類に対し忌避効果があるとされる光反射資材『虫フラットシート』及び『虫フラットネット』（いずれも小泉製麻株式会社製）をイチジク樹の周囲に設置し（写真2）、樹体付近へのアザミウマ類の侵入抑制効果を確認するとともに、果実への被害軽減効果を検証した。なお、試験期間中は殺虫剤の散布は行わなかった。



写真1 イチジク果実の被害 (左: 正常果 右: 被害果)

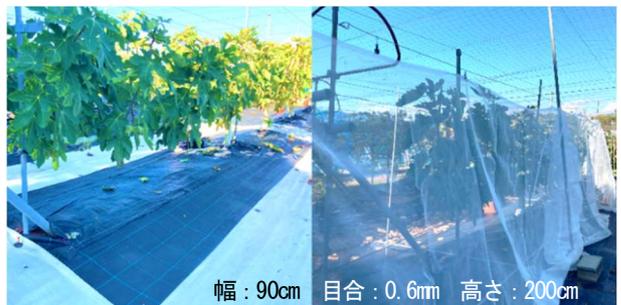


写真2 資材設置の様子 (左: シート、右: ネット)

青色粘着板 (20×10cm) を各区3枚ずつ地上100cmの高さに設置し、5月下旬から7月下旬にかけて約7日おきにアザミウマ類の捕獲頭数を計数し、発生消長を調査したところ、発生が多い

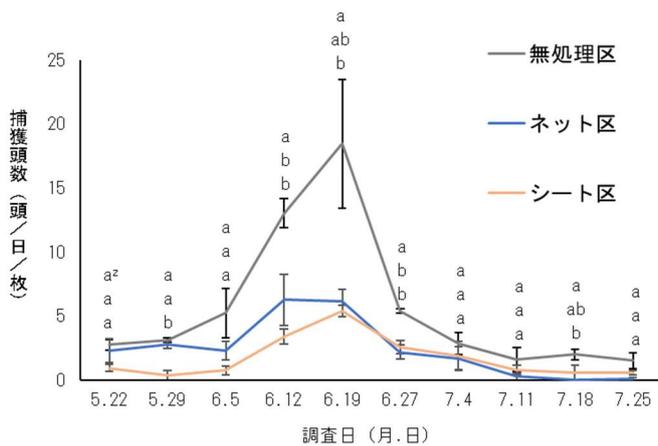


図 青色粘着板によるアザミウマ類の発生消長 (2024年)

図中縦線は標準誤差を示す (n=3)

² Tukey-Kramer 法の多重検定により、異なる英文字間には5%水準で有意差あり

6月中下旬において、両資材区で少なく、抑制効果が認められた (図)。一方、8月中旬から10月上旬にかけて収穫適期の果実断面を調査したところ、被害軽減効果は判然としなかった (表)。

表 イチジク ‘榊井ドーフィン’ における光反射資材利用がアザミウマ類による被害果率に及ぼす影響 (2024年)

処理区	被害果率 ² (%)
無処理区	7.1 a ^y
ネット区	6.2 a
シート区	4.7 a

² 各結果枝における全果実について、被害の有無を調査

^y Tukey-Kramer 法の多重検定により、異なる英文字間には5%水準で有意差あり (n=15、ただし Arcsin-Radian 変換後による)

今後の方針

光反射資材の利用によるアザミウマ類の侵入抑制効果は認められたが、資材利用のみでは果実被害を抑えきれないため、薬剤防除との併用等、効果的な活用方法について検討する。

北村 睦季 (農産園芸部)